

206枚の大図が発見された
米国・ワシントンの議会
図書館



江戸後期の測量家・伊能忠敬(1745—1818)が製作した日本地図(伊能図)の写し206枚が、米国・ワシントンの議会図書館で発見された。その多くは日本国内に現存せず、散逸したと考えられていた貴重な史料。4日、発見報告の記者会見に臨んだ関係者は「未発見だった地域の写しが多数含まれ、ほぼ全国を網羅できる。歴史的価値は高い」と意気軒高。100年以上の時を超えて、消息判明した伊能図は何を物語る？



伊能忠敬



発見された「大図」について説明する渡辺
一郎さん。4日午後、東京都千代田区で

伊能図206枚発見

③忠敬が考案した方位測定器「半円方位盤」④当時の測量作業を描いた「夜中測量之図」。右側の赤い敷物に座り明かりを持っている人物が忠敬ともいわれる



Tokyo 発

03(5461)8030 FAX 03(5461)8033

米で研究者「江戸列島」網羅



「伊能図の全容が明らかになり、忠敬の残した測量日記と照らし合わせれば、当時の測量の様子も詳しく分かるはず」
写しを米国で発見した「伊能忠敬研究会」(新宿区)の渡辺一郎代表理事(セ)は会見で、興奮気味に語った。協力した日本国際地図学会・鈴木純子

常任委員(六)と日本地図センター・永井信夫理事(五)も「百年以上埋もれていたのが見つかり、驚くばかり」などと口々に。

忠敬は上総国小関村(現・千葉県九十九里町)生まれ。五十五歳から全図の測量に着手。後に江戸幕府の命を受け、十七

年間、測量を続けた。米国で発見された二百六枚は「大図」の写し。大図とは、縮尺三万六千分の一で、全二百十四枚とされる。

これまでに日本国内で発見された大図の写しは、江戸を含む関東地方や山口、長崎県などの約六十枚だから、貴重さが

分かつというもの。今回の発見分と以前の発見分を除くと、未発見の大図の写しは六枚(北海道・函館、静岡・沼津など)を残すのみ。

渡辺さんは四、五年前から「米国やロシアにも伊能図の写しがあるはず」とにらんでいた。

今年三月末、所用で渡米した際、「ちょっとのぞくか」と軽い気持ちで訪れた議会図書館の地図部で悲願の地図を発見。「一発で出てきてビックリ」。

管理者の地図部長も「日本に残っていない日本地図だ」と聞いて驚いた。

折り返された大図は、広げると畳一畳大(約九〇センチ×約一八〇センチ)。保存状態も良かった。

(明治十二年ごろの旧陸軍の記録に「伊能図を写した」とある)と話し、大図の北海道の部分に「第七軍管」と書かれていたことから、軍が用済みとした大図が何らかの理由で流出したとみる。一方で、「政府による払い下げ説」も消えない。いずれにせよ、流出時期は明治初頭から一八九七年の間か。

渡辺さんは「今回の地図は保存用でなく、縮尺変更(作業用)の写し。もっときれいな着色された伊能図がまだ米国にあるんじゃないか」と期待を膨らませる。

今後は、日本の古地図を所蔵する米国の博物館や美術館などの目録をインターネットで調べる一方、今回発見された伊能図の展示を目指す。現物を借りるか、色のない部分に色を塗った完全複製を作り、みなさんに見せたい(渡辺さん)。

今秋、原寸の中図を分割し、並べた見開きの地図帳も発売される。伊能図は後世への贈り物。「うちの村も通ったんだ」と、忠敬を身近に感じてもらいたい」と渡辺さん。いつか、大図を地図帳にして、手に取って見られるようにするのが、夢という。

文・小林孝一郎/写真・神代雅夫/紙面構成・今泉直人

渡辺さんは六月、鈴木さんらとともに再渡米。地図の寸法や描いた範囲、特徴などを五日間で徹底調査した。

米国への流出経路について、渡辺さんは当初、「戦後の混乱期に米軍に接収されたか」と思っていた。だが、議会図書館に地図部が出来た一八九七(明治三十年以降の記録に、伊能図の入庫記録はなく、それ以前から存在していたらしい。伊能図を基にした近代日本地図が初めて市販されたのは、一八七二(明治四年)。

鈴木さんは「一八七九

小川和彦さん(33)